

国立国語研究所学術情報リポジトリ

異文化接触とポライトネス：
ディスコース・ポライトネス理論の観点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3595

「異文化接触とポライトネス-ディスコース・ポライトネス理論の観点から」
『国語学』54(3)、国語学会:117-132.16頁.2003年7月.

異文化接触とポライトネス

—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—

宇佐美 まゆみ

キーワード：異文化接触，ポライトネス，ディスコース・ポライトネス理論，対人コミュニケーション，待遇表現

要 旨

本稿では、「異文化接触とポライトネス」にかかわる問題を、「ディスコース・ポライトネス理論（DP理論）」の観点から考察する。そのために、まず、本稿で言う「ポライトネス」の定義を確認した上で、「ポライトネスの普遍理論研究」と「ポライトネス・ストラテジーの比較文化語用論的研究」の区別を明確にする必要性を指摘する。次に、欧米で発展してきた「ポライトネス理論研究」と日本国内で研究が進んできた「待遇表現研究」との違いを明らかにするとともに、その相互発展の可能性にも触れる。それらを踏まえた上で、「DP理論」における基本的概念を解説し、異文化接触において、第一言語におけるポライトネス・ストラテジーが、第二言語に転移されることによって引き起こされる異文化間ミス・コミュニケーションの問題の解決に、DP理論の枠組みがいかに貢献できるかを、具体例をあげながら論じた。

1. はじめに

「異文化接触と日本語」というテーマは、新鮮に響く。しかし、言うまでもなく、日本語における外来語や外国語を元にした造語、古くは文字・漢語・漢文なども、異文化（異言語）接触の結果であったことを考えても分かるように、そもそも、ある言語・文化というものは、常に、異文化接触をしながら変容しているものである。

「異文化接触と日本語」についても、大きくは、通時的、共時的という2つの観点から考えることができる。文法、音韻等の体系は、変容に時間がかかるため通時的な分析が不可欠である。一方、共時的に見て興味深いのが、「言語使用」である。つまり、「言語使用」には、異文化接触の影響が表れやすいため、その即時的な変化や影響を記述することができる。このような、生きた言語行動の比較文化語用論的記述や分析によって、異なる言語・文化における言語行動の違いやそれが引き起こす誤解やミス・コミュニケーションを同定するのみならず、その問題の解明へとつなげていくことができる。

現在の異文化接触が今後の日本語の言語使用の体系や、ひいては、日本語自体の体系に、いかなる影響を及ぼすかについては即座には断言できない。しかし、現在の生きた

言語使用の様々な側面を分析することによって、少なくとも、日本語、ひいては、日本人の価値観、日本社会のあり方などにおける変容の方向を、「予測」することはできる。それが、言語使用の研究、すなわち、語用論研究の醍醐味の一つでもある。

さて、本稿では、「異文化接触とポライトネス」にかかわる問題を、「ディスコース・ポライトネス理論（以後、DP理論）」（宇佐美，2001a；2002）の観点から考察する。そのために、まず、本稿で言う「ポライトネス」の定義を確認し、日本国内で研究が進んできた「敬語」や「待遇表現」との違いを明らかにする。それらの違いを踏まえた上で、DP理論における基本的概念を解説し、DP理論の枠組みが、異文化接触において、第一言語のポライトネス・ストラテジーが、第二言語に転移されることによって引き起こされる異文化間摩擦の問題の解決に、いかに貢献できるかについて考察する。

2. 異文化接触と「ポライトネス」を論じる前に確認しておくべき事柄

Brown & Levinson（以後、B & L，1987）が定義した「ポライトネス 'politeness」が、常識的な意味での 'politeness'（丁寧さ、礼儀正しさ）という概念を、そのままカタカナにしただけのものではないことや、「ポライトネス」が、日本語を初めとする敬語体系を持つ言語における「敬語使用」と同義ではないことについては、ここ10年来、繰り返し論じてきた（宇佐美，1993；1994；1998；2001a；2002；Usami，2002等）。しかし、この「ポライトネス」という用語や概念が「日常的に身近」で「常識的な」ものであるだけに、その「専門的捉え方」についてさえ、研究者による見解の相違が生じ、さらに、それが、様々な議論の混乱を引き起こしてきたといっても過言ではない。

B & Lで言う「ポライトネス」の概念は、強いて言えば、「対人配慮行動」とでも言うのが最も近いと筆者は考える。しかし、このような重要な「新概念」については、議論を混乱させないためにも、提唱者であるB & Lの使用したオリジナルの用語を尊重し、その影響を受けたことを明確に示すべきであると考えられる。B & Lのポライトネス理論の発想を真似たものに、全く異なる用語を当て^{注1}るなどして、専門的な議論を混乱させることは、避けたいものである。本稿では、ポライトネスや敬語にかかわるこれまでの議論の混乱をこれ以上広げないためにも、「ポライトネス」という用語を用い、その定義と捉え方のポイントを改めてまとめ直した上で、後の議論へとつなげたい。

2.1 ポライトネスの普遍理論探究のための「ポライトネス」の操作的定義の必要性

ポライトネスの普遍理論を追究するためには、「ポライトネス」という用語を操作的に定義しておく必要がある。つまり、「ポライトネス」という言葉の「語源」や「意味論的意味」、「常識的意味」を問題とするのではなく、定義した内容に相当するものが、「ポライトネス」であると考えなければならない。本来は、操作的に定義された概念さえ理解していれば、用語自体は、「ポライトネス」でも「対人配慮行動」でもどちらで

も構わない。用語の違いが理論の本質を妨げることはないのである。

B & Lの「ポライトネス」の最も簡潔な定義は、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」とであると説明してきた。これを、より厳密に、操作的に定義すると、「『ポジティブ・フェイス』と『ネガティブ・フェイス』という人間の2つの基本的欲求を満たすような言語行動」とであるということになる。人間には、対人コミュニケーションに関する2つの「基本的欲求」があるとする。他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、仲間に入れてほしいという「プラス方向への欲求」である「ポジティブ・フェイス (positive face)」と、他者に立ち入れられたくない、邪魔されたくないという「マイナス方向に関わる欲求」である「ネガティブ・フェイス (negative face)」である。「ネガティブ」とは、「否定的な」という意味でも「消極的」という意味でもない。

この2種類のフェイスについては、B & L (1987) の中でも、パラフレーズする形で、例えば、「ポジティブ・フェイス」は「肯定的な自己イメージ」、「ネガティブ・フェイス」は「行動の自由と束縛からの自由」などのように説明されていたりする。しかし、そのような、用語のより概念的で一般的な表現や説明に「こだわってしまう」と、操作的に定義された概念で構成されているB & Lのポライトネス理論の本質を見失ってしまうことになる。

「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」を、それぞれ、他者に「近づきたいという欲求」と「ある程度は距離をおきたいという欲求」という「2種類の基本的欲求」として操作的に捉えることが、この理論の正確な理解に最も必要なことである。B & Lは、この人間の「基本的欲求」としての2種類のフェイスを脅かさないように配慮するストラテジー群の「総称」を、「ポライトネス」であると捉えた。そして、それぞれ、ポジティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んだのである。

B & Lの言う「ポライトネス」とは、操作的定義に基づくと、「人間の2つの基本的欲求であるポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスを配慮する言語ストラテジーである」ということになる。B & Lの言う「ポライトネス」とは、それ以上でも以下でもない。

2.2 「ポライトネス」と「ポライトネス・ストラテジー」の違い——議論の混乱を避けるために——

欧米においても「ポライトネス」の捉え方には様々な立場や見解の相違がある。故に、この用語には、①ポライトネス、及び、ポライトネス理論に対する異なる立場やアプローチ全般に言及する場合（広義）と、②特定の理論において定義されている「ポライトネス」を指す場合（狭義）の2通りの使い方があることに注意する必要がある。

本項で説明する「ポライトネス」は、基本的には、B & Lの理論において定義されている、どの言語・文化にも共通する「ポライトネスの普遍的原則」を指すことが多いが、特に、各文化に固有のポライトな言語行動を指す場合は、「ポライトネス・ストラテジー」と呼んで、両者の区別を明確にするほうが正確である。

これまで「ポライトネス」と「ポライトネス・ストラテジー」を明確に区別しないまま、例えば、「日本語のポライトネスと英語のポライトネスは異なる。だから、ポライトネスの普遍理論などはありえない」というように、B & Lの「ポライトネス理論」の「普遍性」を安易に否定するような、短絡的・的外れな批判がなされ、議論を混乱させてきた感がある。しかし、それらは、正確には、「日本語のポライトネス・ストラテジー」と英語のポライトネス・ストラテジーは、異なる」という当然のことを指摘していたに過ぎず、B & Lの普遍理論の批判にはなっていない。

言語行動として表面に表れる具体的な「ポライトネス・ストラテジー」は、当然、各々の言語・文化によって異なる。しかし、円滑な人間関係を保つためのストラテジーとしての「ポライトネス」への欲求・動機には、普遍性があるはずであると考えるのが、「ポライトネスの普遍理論」探究者の立場である。普遍理論探究の目的は、そもそも、各々の言語・文化によって異なる「ポライトネス・ストラテジー」として具現化するものの背後にある「メカニズムの普遍性」を扱うものであるということを、改めて強調しておく。この理論が、言語理論ではなく、「人間の社会的行動の理論」として位置づけられる所以である。

「異文化接触とポライトネス」について論じる際に、文化による違いが問題となるのは、主に、「ポライトネス・ストラテジー」のほうである。それに対して、「ポライトネスの普遍理論」のほうは、むしろ、ポライトネス・ストラテジーの文化による違いが引き起こす摩擦や異文化間ミス・コミュニケーションなどの様々な問題の解決の糸口を導くヒントになるものなのである。

2.3 「ポライトネス研究」への2つのアプローチ——普遍理論探究か比較文化対照研究か——

例えば、多くの文化において、何かの機会に初めて会った人には、挨拶をする。表面に表れる行動は、お辞儀であったり、握手であったり、胸の前で手を合わせたり…と文化によって異なる。言語表現も、「はじめまして」、「どうぞ、よろしくお願いします」、「お会いできて嬉しいです」などと、その原義も、言語によって異なる。このような「違い」に着目して、様々な文化における初対面の挨拶の言語表現を対照的に記述していくことや、そこから各々の文化的価値観の違いを探っていくことは、比較文化論の観点から意味がある。言語表現の「相対性」の追究の部分であり、「ポライトネス・ストラテジー」の比較文化的研究にも通じる。

しかし、一方、言語行動の「普遍性」を追究するということは、このような表面に表

れた言語・文化による相違の背後にある「共通性」を見出す作業である。つまり、上の例で言えば、しぐさや言語表現は違っても、「初めて会った人には、(敵対しないことを示すために) 何らかの挨拶行動をする」という点を、普遍性として抽出するのである。

これまで「ポライトネス研究」としてひとくりにされていた研究も、本来は、「ポライトネスの普遍理論」にかかわる研究であるのか、もしくは、「ポライトネス・ストラテジーの比較文化対照研究」であるのかが、明確に区別され認識されなければならない。

2.4 「待遇表現研究」と「ポライトネス理論研究」

「ポライトネス」が、「敬語使用」と同義ではないことは、最近、やっと周知されるに至ったように感じるが、欧米のポライトネス研究と、これまでの日本語学(国語学)研究の接点を見出し、より生産的な交流を行っていくためには、まずは、世界のポライトネス研究や日本語研究と同じ土俵にあらなければならない。最近、日本語学(国語学)の領域においても「待遇表現研究」、「敬語研究」の関連で、「ポライトネス」という用語が言及されることも増えてきた。外来の「ポライトネス」という概念も、吟味・検討の対象とすることによって、日本語の待遇表現研究、ひいては、日本語研究にも広がりを持たせようとの昨今の日本の学界の積極的な捉え方は喜ばしい。

しかし、現状では、ポライトネス理論研究と待遇表現研究の実質的な交流はほとんどないと言っても過言ではない。現実には、欧米を中心に主に英語で発表されているポライトネス研究や、そこでの知見が取り入れられた日本における英語学や日英対照研究などにおける成果が、間接的に日本語学(国語学)の分野においても言及されるようになってきた程度で、残念ながら、日本語学(国語学)からの世界への発信はほとんどない。ただし、英語圏で活躍している日本語研究者の中には、日本語学(国語学)の代表的・基本的な文献にもつおさに目を通し、多くを引用している研究者も少数ながらあるので、日本語学(国語学)からの発信も、間接的な形で、ある程度行われているとは言える。

そういう現状の中、今後、世界の学界という土俵に上がり、生産的な交流をすることによって世界の学界を活気づけ、多大なる相互発展が期待できるのが、日本語における「敬語研究」、「待遇表現研究」のこれまでの膨大な成果と、その蓄積に基づく「新たな展開」である。ただし、そのためには、これまでの国内外における研究成果を包含するような、言語行動の新しい捉え方の枠組みが提案されなければならない。その一つの試みが、「ディスコース・ポライトネス理論構想」(宇佐美, 2001a; 2002)である。

これまでの日本語における「待遇表現」の研究は、「敬語論」とは異なり、丁寧ではない言語表現や罵り表現なども含むという意味で、B & Lの「ポライトネス理論」よりも扱う研究対象も広く、ある意味でより視野の広いものであったと言える。しかし、

日本語の「待遇表現」の研究は、これまでのままでは、以下の2点において、「ポライトネスの普遍理論研究」よりも狭い範囲を対象としているものとして位置づけられる(狭い範囲を対象とする研究が劣るということでは決してない)。(1)日本語のみを対象としていること。つまり、日本語だけではなく、その他の言語にも当てはまるような「原則」を探究するということが、想定されていない。(2)あくまでも「表現形式」を対象としており、「言語使用の効果」や「談話レベルの言語行動」などは、体系的には研究されてこなかった。

例えば、三省堂「大辞林(第二版)」には、「待遇表現」は、「話し手が、聞き手あるいは話題の人物との人間関係によって、尊敬・親愛・侮蔑などの気持ちをこめて用いる言語表現、またはその形式」とある。また、菊地(1994)は、「待遇表現」を、「基本的には同じ意味のことを述べるのに、話題の人物/聞き手/場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分けるとき、それらの表現を待遇表現と言う(菊地, 1994: 21)」と定義している。つまり、国内における「待遇表現」の研究は、基本的には、日本語を前提として、相手や場面、状況に応じて、「いらっしゃる」を選ぶか、「行く」を選ぶか、「行きやがる」を選ぶかというような、待遇をマークする「言語表現の選択」を研究対象とするものであることが分かる。また、基本的に、文レベルの考察を対象としている。

しかし、敬語体系を持たない英語のような言語においても(或いは、恐らくほとんどすべての言語において)、「話題の人物/聞き手/場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分けると」という現象はある。例えば、「Pass me the salt.」と言うか、「Could you please pass me the salt?」と言うかの選択や、「buy」と「purchase」というような語彙の使い分けなどがそうである。ただ、それが、日本語の敬語のように明確に形式化、文法化されていないだけのことである。ただ、このような、形式化・文法化の有無にかかわらずある「共通性」に着眼して、日本語における「待遇表現研究」に、他の言語にも応用できる普遍的な視点を持ち込めば、それが普遍理論や、或いは、表現の選択基準についての、比較文化対照研究に発展していく可能性も大いにあるだろう。

事実、待遇表現のうちで「丁寧さ」に配慮した表現群を「敬語表現」と呼び、談話レベルの運用を視野に入れた研究も出てきている(蒲谷・川口・坂本, 1998; 川口・蒲谷・坂本, 2002等)。しかし、それらも、基本的には、日本語の「表現」自体を主たる研究対象とする「表現の連鎖」としての「談話展開の類型生成」の研究であり、DP理論が対象とするような、「談話それ自体も一変数とする」という発想や、失礼な言語行動や不快な言語行動も同じ体系に取り込もうとするような方向性は示されていない。

このように、B&Lのポライトネス理論と比べると、日本語学(国語学)における「待遇表現研究」は、B&L以前の欧米におけるポライトネスへの「言語学的アプローチ」がそうであったように、その対象が、「表現」に特化され過ぎている感があり、よ

り広い「言語行動」、「言語使用」という観点に乏しいと言わざるを得ない。

つまり、これまでの待遇表現研究では、相手や場面、状況に応じて選択されるべき聞き手への待遇を言語表現に反映させるという、文字通り「待遇法」の「規範」が追究されてきたのである。すなわち、「社会的規範や慣習に即した言語使用」の観点が重視されてきたと言える。しかし、その「規範」は、人間の「上下、親疎、内外」などに関する伝統的な価値観に基づく「人間関係の認知の仕方」を基準としているため、そこには、個人の価値観を反映させる余地がほとんどない。つまり、日本語では、「社会的に決められた」基準で、相手を上と見るか下と見るか、内と見るか外と見るかななどを強制的に判断させられ、それを一発話ごとに「言語形式」に反映させ、さらには、そういう言語表現を適切な順序で連鎖させなければ、正しい待遇表現行動にはならない仕組みになっている。その枠の中で、規範的表現とその連鎖の類型を探究しているのが、談話レベルの視点も含めた「待遇表現研究」であるように、筆者には見える。

それに対して、B&Lのポライトネス理論は、「言語の運用」というものを、規範通りに行われるべきものとしてではなく、「個人の方略的な言語使用」という観点から捉えようとした。つまり、B&Lのポライトネス理論は、個人の方略的な言語使用に着目したという点によって、「言語理論」ではなく、「対人コミュニケーション理論」へ一歩踏み込んだものとして位置づけられる。また、その点において、「言語表現の規範の研究」としての「待遇表現研究」とは、大きく異なると言える。

2.5 「待遇する」ということと、「コミュニケーションする」ということの違い

「敬語」とは異なり、「待遇表現」という用語は、既に「待遇という行為」を含むニュアンスを持っていた点は高く評価できる。しかし、そこには、文字通り、「人を待遇する」という「一方向的」な発想が強く出ている。一方、B&Lも、あまりにも話し手の側の方略的な言語使用に重きをおき過ぎた点で、「一方向的」であったと言える。このような、待遇表現研究やポライトネス理論研究という内外の主要な研究に共通する問題点を克服しようとするのが、「ディスコース・ポライトネス(DP)理論」(宇佐美, 2001a; 2002)である。

DP理論は、B&Lの理論においては付随的にしか扱われていなかった「談話レベルの要素」や「周辺言語」にまで扱う対象範囲を広げ、言語表現だけではなく、「発話効果」という観点をも考慮に入れることによって、B&Lの理論よりも、さらに「相互作用」という観点到重きをおいた「対人コミュニケーション理論」へと発展させようとしたものである。DP理論では、待遇表現という言葉に反映されているような相手を一方的に「待遇する」という発想ではなく、また、B&Lの理論におけるような「話し手のFT度の見積もり」という「一方向的」な観点からだけでなく、常に、話し手と聞き手の相互作用としての「コミュニケーション」という発想で言語行動を捉える。

「待遇表現の使用」も、「双方向的」な「相互作用」や「交渉」のための、或いは、円滑な人間関係を保つための「対人コミュニケーションの手段」に成り得るものとして捉える。つまり、「待遇表現」とは、結局は、「人を待遇する」ために用いられているのではなく、「人とコミュニケーションする」ために用いられていると捉えるのである。そういう意味で、DP理論において、「待遇表現」は、DPを構成する、周辺言語も含めた言語行動の諸要素の中の「一要素」として捉えられるのである。

2.6 異文化接触が引き起こすポライトネスにかかわる問題へのアプローチ

「異文化接触とポライトネス」についての考察は、「ポライトネス・ストラテジーの比較文化対照研究」の観点と、「ポライトネスの普遍理論」の観点、双方から行うことができる。異文化接触の現場で生じる誤解や不快感の原因は、各々の言語・文化における「ポライトネス・ストラテジー」の違いの記述、及び、異文化接触場面における、参加者のポライトネス・ストラテジーの第一言語から第二言語への「転移」の有無の調査などによって明らかにできる。

しかし、各々の言語・文化における「ポライトネス・ストラテジー」の違いを記述するだけでは、それらが引き起こす対人コミュニケーション上の問題の「解決策」や「未然防止策」を提示するところまではいかない。異文化接触が引き起こすポライトネスにかかわる問題の解決方法を考えるためには、表面に表れた各々の言語文化によるポライトネス・ストラテジーの違いの背後にある、人間の対人コミュニケーションにかかわる動機の「普遍性」を明らかにし、それに基づいて対処法を考えるということが必要になってくる。つまり、異文化接触において、ポライトネス・ストラテジーの違いを記述し、それが引き起こす問題を明らかにするのが、「ポライトネス・ストラテジー」の比較文化対照研究のアプローチであるのに対して、それらの問題の解決策を見出すのに貢献できるのが、「ポライトネスの普遍理論」であると言えるのである。

このような、「ポライトネス研究」の2つのアプローチそれぞれの興味や役割、目的の違いを押さえた上で、以下に、「ポライトネスの普遍理論」の一つの構想である「DP理論」のポイントを示し、「異文化接触が引き起こすポライトネスにかかわる問題」への対処法の考察に、DP理論がいかに貢献できるかについて論じる。

3. 「ディスコース・ポライトネス理論 (DP理論)」の概要

DP理論では、これまで「待遇表現研究」も、「B & Lのポライトネス理論」もその研究対象に本格的には取り入れてこなかった談話行動の「諸要素それぞれの働き」と、それら「諸要素の機能の総体」も主要な研究対象に含める。また、「文/発話行為レベル」から「談話レベル」へと単に分析単位を拡大しただけではなく、談話それ自体も一変数として扱うことによって、ポライトネス研究を、従来の「絶対的ポライトネス」の

研究から、「相対的ポライトネス」の研究へと拡大するものである。具体的な分析対象には、スピーチレベルのシフト、話題導入の仕方や頻度、あいづちや終助詞の使用法や頻度、前置きの有無、依頼までの前置き談話の流れ、ほめ談話の流れ等がある。

「異文化接触とポライトネス」を考えるとということは、第一言語でのポライトネスのスキーマ (DP理論で言う「基本状態」) と第二言語におけるスキーマとの接触によって引き起こされる認知的転移現象を論考するということである (西原, 2002), そういう転移現象が、第二言語におけるコミュニケーションにおいて、いかなる誤解や問題を引き起こすかということを分析することである。さらには、そのような問題の解決方法を考えることにつなげていく必要がある。そのためには、まずは、異なる言語社会がそれぞれに固有のコミュニケーション・パターンや、ポライトネス・ストラテジー、談話のポライトネスのスキーマを持っているという事実を認識することが必要である。発話行為レベル、談話レベル、それぞれのレベルにおける言語行動の「パターン」や「スキーマ」, 「典型」にほぼ相当するものが、DP理論における「基本状態 (default)」である。

DP理論では、まず、各言語文化における特定の「活動の型」^{注3}における「基本状態 (default)」を同定していかなければならない。その上で、例えば、母語話者而非母語話者の日本語でのやりとりにおけるポライトネスを、単に、規範的な敬語使用が守られているか否かというような観点からだけではなく、敬語使用も含めた日本語におけるその他のポライトネス・ストラテジーとともに、談話レベルから、多角的に、且つ、動的に分析していくのである。

3.1 「ディスコース・ポライトネス理論」における基本概念・用語

ここでは、DP理論において新しく提示された基本的な概念の中から、主に、異文化接触とポライトネスを分析することにかかわる以下の6項目について、簡単に解説するにとどめる。すなわち、①基本状態 (default), ②「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」, ③「絶対的ポライトネス」と「相対的ポライトネス」, ④「有標行動」と「無標行動」, ⑤3種のポライトネス効果, ⑥見積もり差 (De値), である。

① 「基本状態 (default)」

DP理論の新しい視点の一つは、ポライトネスを、「言語行動のいくつかの要素がもたらす機能のダイナミックな総体」として捉えるということにある。そして、そのように捉えたポライトネスを「ディスコース・ポライトネス (以後, DP)」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。DP理論が新たに組み込んだもう一つの観点は、DPを構成する諸要素が当該談話に占める「構成比率」や諸要素の「頻度の平均」, 「談話展開の典型」などを、当該談話の「基本状態 (default)」という「変数」として捉えるということである。つまり、DP理論では、種々のDPには「基本状態」があるということを想定し、実際の発話効果である「ポライトネス効果」は、その

「基本状態」を基にして、相対的に生まれてくるものであると捉える「相対的ポライトネス」(後述)という概念を、新たに提示したのである。

② 「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」

B & Lのポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為 (FTA: Face Threatening Act)」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度 (FT度) を軽減するためにとるストラテジー」として捉えられている。しかし、B & Lのように、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとるストラテジー」としてポライトネスを捉えると、一見FTAがないように見える「日常会話 (ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できないという問題点があった。なぜならば、我々の日常生活においては、「FT軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもあるからである。それは、「守られていて当たり前で、期待されている言語行動が表われないときに、初めてそれがないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。

筆者は、ポライトネスの普遍理論を確立するためには、このような、一見FTAがないように見える日常会話におけるポライトネスも併せて、より体系的にポライトネスを捉えていく必要があると考える。そのためには、ポライトネスを、「有標ポライトネス (marked politeness)」と「無標ポライトネス (unmarked politeness)」とに分けて考え、それぞれを体系化した上で、さらに、双方を包括する理論を構築する必要があると考えている。また、このような観点から考えると、B & Lのポライトネス理論は、「有標ポライトネス」についてのみの理論であったと位置づけることができる。

③ 「絶対的ポライトネス」と「相対的ポライトネス」

言語形式について言うなら、「行く」より「いらっしゃる」のほうが丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、よりポライトであるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っている。国内外を問わず、それが、20世紀の語用論が対象としたポライトネスであったと言える。しかし、DP理論では、いつも「ため口」で話す相手(「基本状態」がため口)に「敬語」を使っていやみを言うというような言語使用が生み出す「実質的効果」は、たとえ、敬語を使っても、「マイナス・ポライトネス効果」と捉え、よって、ポライトではないとする。つまり、常体が無標である談話においては「有標行動」となる敬体の使用は、言語形式自体は、「敬体」であるにもかかわらず、失礼だと感じさせたり、不愉快にさせるなどの「マイナス・ポライトネス効果」をも生み得るのである。一方、仲間意識を強めるために用いる「ため口」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス・ポライトネス効果として機能する。このように考えると、実質的に、ポライトネスの効果を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という、言語行動の「動き」であると考えられる。これが、「相対的ポライト

ネス」という捉え方である。

④ 有標行動と無標行動

DP理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネスを相対的に捉えるために同定する必要があるものである。つまり、DP理論では、各々の談話の「基本状態」を基にして、そこからの「動き」に着目して「相対的ポライトネス」の体系化を試みる。基本状態を構成する言語行動を「無標行動」と呼び、基本状態から逸脱した言語行動を「有標行動」と呼ぶ。有標行動と有標ポライトネスは、別次元のもので、有標行動が、必ずしも有標ポライトネスになるとは限らない。DPの基本状態は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。つまり、基本状態を構成する諸要素は、あって当たり前のものでDPを形作っており、その中の何かが欠けても、或いは、何かが多すぎても、それが意識され、ポライトでないと認知されると想定するのである。

⑤ 3種のポライトネス効果

DP理論では、「FT軽減行為」は、一種の「有標行動」であると捉える。有標行動がもたらし得る効果には、①プラス・ポライトネス効果、②ニュートラル・ポライトネス効果、③マイナス・ポライトネス効果の3通りがある。これらは、言い換えると、「心地よい」という効果、「ニュートラル」な(特にポライトでもなく、不愉快でもない)効果、「不愉快」な効果である。談話レベルでニュートラル・ポライトネス効果を考えるには、先に説明した「無標ポライトネス」という概念が必要になる。③のマイナス・ポライトネス効果は、B & Lのポライトネス理論では、「ポライトネス・ストラテジー」を行わないこと、すなわち、「相手のフェイス侵害度を軽減する努力をしない」ことが自ずと生む効果として含意されていたとは言えるが、体系的には扱われていなかった。

そのため、「ポライトネス」の概念をさらに拡大して、ニュートラル・ポライトネス効果や、マイナス・ポライトネス効果をも、同一の枠組みで統一的に扱おうとするのが、DP理論である。プラス、ニュートラル、マイナスという3種類のポライトネス効果は、基本的に、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差」^{注4}を数値に置き換えた形で連続線上に表すことによって、体系的に捉えられる(次ページの図1参照のこと)。そうすることによって、「マイナス・ポライトネス効果」、すなわち、「不愉快」も、DP理論で包括的に説明できるのである。

マイナス・ポライトネス効果には、もちろん、「言語形式は丁寧だが、どこか不愉快である」という「慇懃無礼」も含まれる。これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかったこの「慇懃無礼」とは、DP理論で解釈すると、「相手の言語行動が、こちらが当該の状況で適切であると考えられる言語行動、つまり、当該の状況の「フェイス侵害度の見積もり」に応じた言語表現よりも、許容できるずれ幅 α を超えて、「丁寧な表現」である」場合であるということになる。

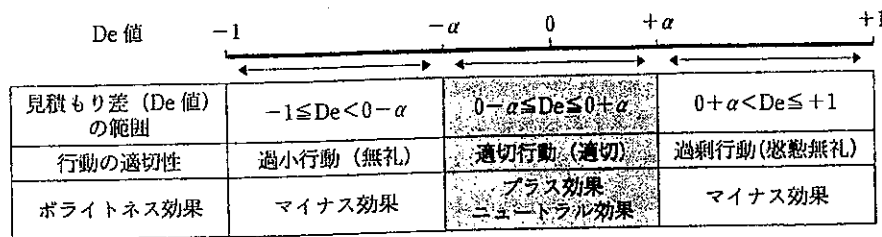
ポライトネス効果の認定の仕方は、有標ポライトネスと無標ポライトネスで異なる。

有標行動の「ポライトネス」を捉える際は、当該の談話の「無標ポライトネス」の「基本状態」を同定した上で、有標行動が生じたコンテキストや発話内容を考慮して、「有標行動が生み出す効果」としてのポライトネスを同定していく。「有標ポライトネス」の効果は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積り差」として捉えられるが、無標ポライトネスの場合は、「どういう談話、或いは、談話展開を『基本状態』と捉えるか」という「話し手と聞き手の『基本状態の認知』の差」が、以下に述べるポライトネス効果の指標である「見積り差 (De 値)」となる。

このように、「ポライトネス効果」を相対的に捉えるだけではなく、話し手と聞き手双方の「フェイス侵害度の見積り」や「基本状態の認知」の「ずれ」という「相互作用」を体系に組み込んだという点が、DP 理論における新しいポライトネスの捉え方の最も重要な側面の一つであり、「異文化接触場面」で生じる問題を記述する際の一つの基本的な枠組ともなり得る点である。

⑥ 見積り差 (De 値)

「見積り差 (De 値)」とは、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積り差」(注 4 参照)の値である。De 値は、絶対的な数値として算出できるわけではないが、「0 を中心とする -1 から +1」までの範囲の連続線上に分布すると考える。すなわち、「De 値」を横軸とする連続線に示すと、「De 値」と「ポライトネス効果」の関係は、以下の図 1 のようになる。



見積り差 (De 値) : $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) 側から見た「話し手の行為のフェイス侵害度」の見積り (estimation) 仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

He : 聞き手 (Hearer) 側から見た「話し手の行為のフェイス侵害度」の見積り (estimation) 仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

α : 許容されるずれ幅

図 1 「見積り差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

3.2 「DP 理論」のまとめ

DP 理論では、「ポライトネス・ストラテジー」は、話し手の側の、当該の行為の「フェイス侵害度の見積り」に基づいて選択されるものとして捉えるが (B & L のポライトネス理論が対象とした部分)、そのストラテジーが実行された後の、「ポライトネス効

果」は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積り差」によって生まれると考える。つまり、「ポライトネス効果」には、聞き手の側の視点が含まれている。DP 理論は、そのような「話し手と聞き手の相互作用」と、その結果生じる「スキーマ認識」のずれなどの全体を研究対象として、総合的に捉えるのである。「ディスコース・ポライトネス」という際の「ポライトネス」は、話し手のポライトネス・ストラテジーや絶対的ポライトネスだけではなく、様々な談話の基本状態とそれが元になって生まれる「相対的なポライトネス効果」などすべてを総称する意味あいになる。さらに、「ディスコース・ポライトネス理論」と言うと、このような談話行動が生じるメカニズムの普遍性を、対人コミュニケーションの観点から追究する「枠組み」を指すことになる。

4. 異文化接触と「DP 理論」——具体例をあげながら——

「DP 理論」は普遍理論をめざすものである。しかし、これまで「文化の相対性」という観点に重きがおかれていた発話行為の文化差に関する研究も、DP 理論によって、また違った観点から捉え直すことが可能になる。すなわち、「依頼」や「断り」など、従来、文化による違いが指摘されてきた研究も、DP 理論の観点から見ると、「依頼談話」や「断り談話」の無標ポライトネスの「基本状態」が、言語・文化によって異なるということが明らかにされた研究とみなすことができる。それらの結果を単に「文化差の記述」として留めておくのではなく、特定の文化におけるある談話の「基本状態」として捉え、そこからの「有標行動」の「動き」が「ポライトネス効果」を生むという観点から捉え直すことによって、無標ポライトネスとしての「基本状態」が文化によって異なるという事実によって生み出されている、異文化間ミス・コミュニケーションの原因の解明につなげていくことができる。

例えば、謝オン (2001) は、授業関連のプリントやノートを借りることを依頼する「依頼談話」の日中比較研究において、日本語では、「依頼発話」が切り出されるまでに、「注意喚起」「見込みの確認」「補助ストラテジー」という発話連鎖を経るのに対して、中国語においては、「注意喚起」の後、すぐに「依頼発話」に移るという結果を報告している。このような結果を踏まえると、もし、中国人日本語学習者が、「注意喚起」の後、すぐに「依頼発話」に移るという中国語の無標ポライトネスである発話連鎖を、日本語に転移させた場合、日本人は、それを、唐突だとか、失礼だというように感じてしまう可能性もある。一方、中国語において、日本式の長い発話連鎖を伴う依頼の仕方をしたら、それは、中国語においては有標行動となり、よそよそしいと感じられたり、何か他意があるのではないかと勘ぐられたりする可能性もある。

また、金庚芬 (2001) は、親しい友人同士の「ほめ談話」の日韓対照研究において、「ほめの対象」を大まかに「外見」「才能」「性格」「所持物」の 4 つに分類して調査したが、韓国人は「外見」をほめることが多い (43%) のに対して、日本人は、外見はほと

んどほめておらず (14%)、その代わりに相手の「性格 (38%)」や「才能 (34%)」を好んでほめる傾向があったことを報告している。DP 理論では、このような分類項目の「分布」も「基本状態」として捉える。この結果は、韓国語話者が、相手と良い関係を築きたいと考えて「ほめ行動」を行っても、もし韓国語におけるストラテジーをそのまま日本語に「転移」させてしまうと、日本人はあまり行わないという「外見」のほめが多くなり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるはずの「ほめ行動」が、かえって日本人を戸惑わせたり、不快にさせてしまう恐れもあることを示唆している。

また「ほめに対する返答」の研究 (金庚芬, 2002) では、日韓ともに、最初にほめられたときは、まず、そのほめを肯定も否定もしないで「回避」する返答が、約 50% と最も多いことは共通しているが、それ以外では、日本語ではほめを否定する返答が多いのに対して、韓国語では否定は少なく、冗談的に自慢するような返答が多いこと、また、ほめ行動が何度か繰り返されるときのやり取りの推移の方向も、日本語では、最初の返答が肯定だった場合も、徐々に否定的な返答に変化していくのに対して、韓国語では肯定的な返答を繰り返し維持しようとする傾向が強かったことなどが報告されている。

これらの研究結果は、「ほめ行動」も「ほめに対する返答」も、日本語と韓国語においては「基本状態」が異なっていることを示唆していると言える。そのため、日本人と韓国人がお互いにほめ合うような場面において、ほめられた日本人が、ほめを否定する返答をしたり、繰り返すほめでも、だんだん否定的な返答に変化していくとすると、韓国人のほうは、日本人に対して「友達なのによそよしい」とか、「正直でない」と感じる可能性もある。一方、韓国人にとっては親しみの表現とも言える、自慢するような返答や、何度ほめられても謙遜しないという返答は、日本人には「有標行動」と映り、礼儀を知らない、謙虚さが無い、生意気であるなどと感じられてしまう恐れもある。

このように、「依頼の発話連鎖」、「ほめ行動とほめに対する返答の連鎖」というような特定の談話の DP の基本状態は、各々の言語・文化によって異なるということをも十分考慮に入れた上で、母語話者と非母語話者の相互作用を分析していくことによって、敬語の使い方が間違っているというような文レベルの「表現」の問題だけではなく、異文化接触場面における「談話のポライトネス」と、そこで生じる問題の原因を、文レベル、談話レベル双方の観点から解明し、問題解決へとつなげていくことができる。そのためには、まず、何が「無標」となっているのかという各々の言語文化における主要な談話の「基本状態」を同定する調査研究を行い、その結果を蓄積していく必要がある。

5. 異文化接触が引き起こす問題解決にむけての「DP 理論」の今後の課題

「DP 理論」研究の今後の研究課題には、実証研究としての課題と、理論構築のための課題がある。ポライトネスにかかわる異文化間ミス・コミュニケーションの問題の解決に、DP 理論とそれにかかわる研究がいかに貢献しうるかは、DP 理論の実証研究と

しての課題になる。いずれにしても、まずは、種々の言語における、様々な活動の型としての「談話」の「基本状態」を調査し、その結果を蓄積していくことが必要である。

特定の言語・文化における談話の「基本状態」とは、いわゆるその種の談話の「典型」のようなものである。故に、様々な活動の型の談話における「基本状態」を同定していく作業は、一見、当該言語の「談話レベルにおける、社会言語学的規範や慣習に則した言語使用」の実態や典型を明らかにすることが目的のように見えるかもしれない。しかし、実は、DP 理論においては、基本状態の同定の最終目的は、規範的、典型的言語行動の標本を作ることではなく、あくまで、無標ポライトネスとしての DP の「基本状態」を元に、そこからの離脱や回帰という「動き」を捉え、その動きがもたらす効果とそのメカニズムを「相対的ポライトネス」として体系化していくことにある。そのため元となる「変数」として「基本状態」を同定していく必要があるのである。

談話レベルのポライトネス・ストラテジーの文化による違いが、様々な形で異文化間摩擦の原因になっていることは、一般に認識されている以上に多いものである。日本語教育の現場では、規範的な敬語使用とともに、これらの談話レベルのポライトネス・ストラテジーの習得を促進するための体系的なカリキュラムや、指導法の導入の必要性が認識されつつある。未だ、理論の細部の具体的記述という課題を抱えている段階ではあるが、「DP 理論」の枠組みが、「異文化接触とポライトネス」にかかわる問題の解決や未然防止に、また、日本語学習者の日本語ポライトネス・ストラテジーの習得研究に、なんらかの形で新たな視点を提供できるとすれば、それは、望外の喜びである。

注1 「敬意表現」(井出, 2001) という用語が、その典型である。その問題点については、宇佐美 (2001b) を参照のこと。

注2 B & L のポライトネス理論、及び、本稿で用いる「ストラテジー」という用語は、必ずしも、「意識的、自覚的な戦略」を指すものではない。話に聞き入り、知らず知らず、あいづちの数が増えた際の、あいづち行動の変化なども、一種の「言語ストラテジー」と捉える。より詳しくは、宇佐美他 (2001) を参照のこと。

注3 「…レヴィンソン (1979: 368) は、活動の型を次のように定義している。

…[活動の型]とは、境界のはっきりしないカテゴリーであり、その主たる構成要素は活動の目的によって定義され、社会的に構成され、制約されている。言いかえれば参加者や状況など、とりわけ許されている寄与の種類について、制約を持つ事象のことである。典型的な例としては、教育現場、就職のための面接、法廷尋問、フットボールの試合、ワークショップの活動、ディナー・パーティーなど。」トマス著、浅羽監修 (1998: 205)

注4 「見積もり差 (De 値)」については、厳密には、有標ポライトネス、無標ポライトネスなどによって「何の見積もり差」であるかが異なる。しかし、複雑さを避けるため、本稿では、これ以降も、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差」で代表させておく。

引用文献

- 井出祥子 (2001) 「国際化社会の中の敬意表現」『日本語学』第20巻第4号, 明治書院, 4-13。
- 宇佐美まゆみ (1993) 「談話レベルから見た “politeness”: “politeness theory” の普遍理論確立のために」『ことば』, 現代日本語研究会, 14号, 20-29。
- 宇佐美まゆみ (1994) 「性差か力 (power) の差か: 初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」『ことば』, 現代日本語研究会, 15号, 53-69。
- 宇佐美まゆみ (1998) 「ポライトネス理論の展開: ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報1997年度版』, 東京外国語大学日本課程編, 147-161。
- 宇佐美まゆみ (2001a) 「談話のポライトネス ——ポライトネスの談話理論構想——」『談話のポライトネス』, 第七回国際シンポジウム報告書, 国立国語研究所編, 凡人社, 9-58。
- 宇佐美まゆみ (2001b) 「ポライトネス理論から見た〈敬意表現〉——どこが根本的に異なるか——」『月刊言語』, 第30巻第12号 (11月号), 大修館書店, 18-25。
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開(1)~(12)」(連載, 『月刊言語』, 第31巻第1号 (1月号)~第31巻第13号 (12月号), 大修館書店。
- 宇佐美まゆみ・坂本俊生・滝浦真人・橋元良明 (2001) 「ポライトネスのためのキーワード集」『月刊言語』, 第30巻第12号 (特集〈敬意〉はどこから来るか), 大修館書店, 68-72。
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』, 大修館書店。
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (2002) 「『敬語表現』と『ポライトネス』」『社会言語科学』第5巻第1号, 社会言語科学会, 21-27。
- 菊地康人 (1994) 『敬語』, 角川書店。
- 金庚芬 (キム キョンブン) (2001) 「ほめに対する返答の日本語と韓国語の対照研究」, 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文。
- 金庚芬 (2002) 「ほめに対する返答」の日韓対照研究」『言語・地域文化研究』第8号, 東京外国語大学大学院, 179-196。
- 謝オン (2001) 「談話レベルからみた『依頼談話』の切り出し方——日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から——」『日本研究教育年報2000年度版』, 東京外国語大学日本課程・留学生課編, 77-101。
- 西原鈴子 (2002) 「異言語接触におけるポライトネスの諸相」, 『異文化コミュニケーション』第5号, 愛知淑徳大学, 1-12。
- 星野命 (1974) 「あくたいもくたい考—悪態の諸相と機能」『季刊人類学』2巻3号, 29-52。
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S. (1979) Activity types and language. *Linguistics* 17. 5/6 365-99
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London; New York: Longman. (トマス (1998), 浅羽亮一監修, 田中他訳『語用論入門』, 研究社出版)
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.

——東京外国語大学教授——

(2003年4月16日 受理)